

# 各地に残すべき地形・地質 八峰白神ジオパーク 白神山地の恵みに生きる

八峰白神ジオパーク推進協議会 会長 工藤 英美

## ■1、テーマ 白神山地の恵みに生きる

八峰町町民は昔から白神山地と共に生きてきた。山菜を採り食卓に、樹木を切り倒して建築材に、また薪は家事の重要なエネルギー源として活用されてきた。また山地の地下には銀・銅・亜鉛などの鉱床が、平野の地下には石油が胚胎していて昭和の時代にはそれらを採掘し、当町は活気に満ちていた。

## ■2、世界自然遺産と八峰白神ジオパーク

その白神山地の一部(約13%)が1993年、世界遺産に登録され、この地域は国際条約に基づき厳しく保護されることになる。人々は許可なく遺産地域に入山できなくなり、樹木の伐採や狩猟は勿論、地層を壊したり岩石を持ち帰ることすらできなくなったのである。

八峰町は遺産地域とは接しているが、幸いに遺産地域には入り込んでいない(図1)。そのため遺産地域の地形は当ジオパークから概観(写真1)でき、地質に関しては遺産地域と同種の地層を西海岸で観察できる(図2)状況にある。

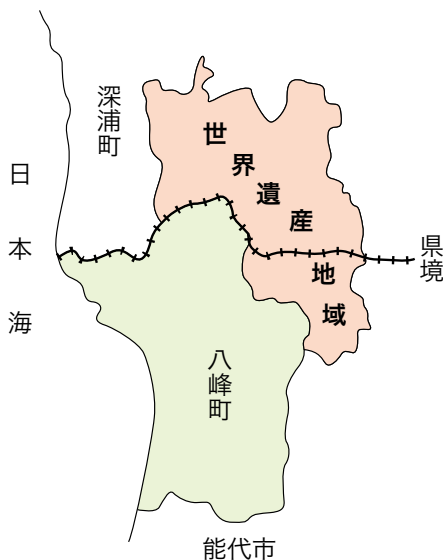


図1 世界遺産地域と八峰白神ジオパークエリア図



(写真1) ニツ森から遺産地域を遠望する

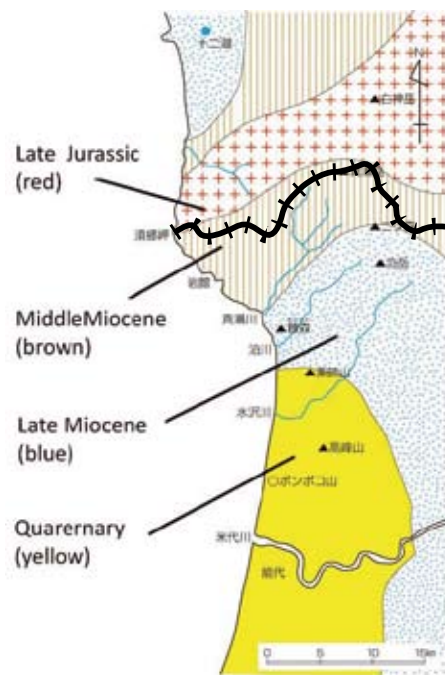


図2 八峰町及び周辺の地質概図

## ■3、急峻な地形というバリア

遺産地域にニツ森(1086m)と呼ばれる孤峰(写真2)があり、昔の人々は里から徒歩で13時間かけて往復したという。標高900mころからはブッシュをかき分けての登山だったようで、簡単には山頂まで到達できなかったと聞く。

白神山地の地形はW・M デイビスの浸食輪廻に照合すると満壮年期に該当し、この急峻なバリアのお陰でブナを主とし

た原生的な自然林が開発の手から逃れて生き延びてきた。溪谷はV字谷となり、随所に滝が形成されている。白神山地から続く河川は人里近くでも滝(写真3)や洞窟を作り、それらは人々の信仰の場として大切に扱われている。



(写真2) 二ツ森山頂に集う海外からのビジター



(写真3) 白瀑、滝つぼで練り歩くみこし

#### ■ 4、謎の多いグリーンタフ変動と鉱山資源

当ジオパークエリアには「白神のスフィンクス」と命名された岩(写真4)がある。硬い溶岩と比較的柔らかい凝灰岩から成り、柔らかい部分が海食によって削られてできた天然の彫刻である。これらの岩石が形成された時代は日本海ができる頃と考えられていて、約2千万年前ころの話となる。

大量の火山灰を伴った海底火山が灼熱の溶岩を噴出し、海は煮え立ち魚は死ぬ、そんな情景が繰り返されたものである

う。火山灰は海水と反応して独特の淡緑色(グリーン)の凝灰岩(タフ)ができる。この一連の活動がいわゆるグリーンタフ変動である。

この時代に形成された地層が当ジオパークでは豊富に観察でき、未固結の砂岩中に灼熱した溶岩が流れ込んでできるペペライト、たくさんの岩脈、柱状節理、火山豆石なども見ることが出来る。

一方、1464年小入川流域で八森銀山が、1888年椿鉱山(後の発盛鉱業所)が発見され、後者は1977年まで稼動した。その長い期間中、旧八森町は鉱業の町として発展し続けた。



(写真4) 天然の彫刻・白神のスフィンクス

#### ■ 5、八峰白神ジオパーク推進協議会の取り組み

前述の内容を、第一に地域の人々に解説し理解してもらう取り組みを実施中である。各地域の自治会単位で、その地域にかかわるジオポイントの解説を行い、ジオパークに関心を持ってもらう。第二にガイド養成に取り組み、町外からのビジターに楽しみながら当ジオパークの面白さを体感してもらう。第三に地形や地質に関する未解決問題の研究を後援団体に依頼し、新しい知見のもとカイド内容のスキルアップをはかる。

そしてビジターが笑顔で八峰白神ジオパークを後にできるよう努力をする。